

第1章 黎明期 ~1928年(~昭和3年)

日本における欧米文化の黎明は、安政6年(1859)長崎、横浜、函館の開港から始まる。北海道のサッカーの黎明も150年前の函館開港をもって始まると言えるだろう。

英国船が函館港に入港し、長く続いた船内生活のストレスを陸上で発散させようとして、乗組員たちは陸上の広場で、ボールを蹴りあったり、ミニゲームに興じたりしたこともあったであろう。

好奇心旺盛な函館の人たちが、物珍しげに集まってきて見物するという情景も少なからずあったと思う。

船舶の修理のために、船渠(ドック)に入れば滞在は長くなる。物珍しげに集まってきた青少年に、ボールを蹴って見せたり、技術を伝授する者もあらわれ、ミニゲームに引き入れたりすることもあったに違いない。こうしたことが下地になり、初期のサッカーがフットボールの呼称のもとに、青少年のあいだに広まっていったと考えられる。

明治19年(1886)創立の函館商業学校の運動会の種目に取り入れられ、住民の人気を博していたようである。

明治23年(1890)4月2日付け函館新聞に、次のように紹介されている。(原文のまま)

「フットボールは前後2列に別ち左右を隔て中に遠藤体操教員立ちてゴムの大鞠投じ左右の生徒をして互いに縄張りせし外に出さしむるものなるが我劣らじと争う中、元来活発なる年頃の生徒ともなれば其争の果て決闘を始め勝敗を判ざる能わざるより足にて蹴出すべく命令したるに是も勝敗

を判ざる能わずして引分けになしたり、参看人は是等の活発なる戯を見て何れも拍手喝采せり」(函館百年史)

(注：縄張りせしとは、ゴールラインとタッチラインのかわりに縄を張ったのであろう。ゴールポストなどなく、ゴールの幅だけ縄張りが無く、ここに蹴りこむことでゴールインとしたのであろう。ラグビーとサッカーの混合ルールであるから手も足も使う、その争いの果て取っ組み合いになり勝敗決しがたく、足だけでゴールに蹴り入れるように命じたけれども勝敗決せず引き分けにした。と解釈できる。)

1863年(江戸幕末)、英国でフットボールアソシエーション(フットボール協会)が出来、ルールの統一が行われたが、遠藤体操教員の指導していたフットボールはラグビーとサッカーのルールが未分化なままであったことがわかる。

日本体育協会発行「スポーツ八十年史」の「わが国にフットボールを伝えたのは、東京高等師範学校講師デハビランド氏(イギリス)で、明治38年(1905)の頃であったが・・・」

と記述されているデハビランド氏が、フットボールアソシエーション式ルール(F A式ルール)をもって学生を指導したことがはっきりしているの、黎明期日本のサッカーの祖はこのデハビランド氏であるといわれている。最近の調査の結果、このデハビランド氏が明治26年(1893)から29年(1896)にかけて函館に在住していたことが判ったのである。

* 日本サッカーの事始め *

日本で最初にサッカーなるものが行われたのは、明治6年(1873年)、東京の浜離宮付近から木挽町(築地)にかけて設置されていた海軍兵学寮(後に海軍兵学校)で英国海軍のダグラス少佐が訓練の余暇のレクリエーションとして33人の部下とともにフットボールを教えたのが最初と定説になっている。(昭和49年、日本蹴球協会編、日本サッカーのあゆみ)

しかし、最近になって「関西サッカーのあゆみ」(平成18年発行)では明治4年3月1日発行の神戸居留地の英字新聞『The Hiogo News』で当日フットボールが行われたという新説が出ている。その後、明治41年に文部省は体育伝習所を創設し、教科の一部にフットボールを取り入れている。ルールブックは明治18年頃より出版されているが、アソシエーションフットボールとして出版されたのは明治36年、東京高等師範学校 坪井教授が欧米から帰朝してからのようである。

当時は、デ・ハビランドの影響があったことが記載されている。(日本サッカーのあゆみより)

英人ウォルター・アウグスタス・デ・ハヴィランド (Walter Augustus De Havilland) 氏は 1893 年(明治 26 年)ケンブリッジ大学神学科卒業後、直ちに函館に向かい日本聖公会函館聖ヨハネ教会のウォルター・アンドリュース司祭のもとに寄留し、信者や近隣の青少年に英語の個人指導をするかわら F A 式フットボールの指導をしていたのである。函館商業学校生徒守谷忍氏の回想によれば、日曜ごとに谷地頭のグラウンドや公園の広場で、クリケットやフットボールを教えてもらったとのことである。

ハヴィランド氏は明治 29 年神戸乾行義塾に転勤し、金沢高校を経て明治 37 年 9 月東京高等師範学校教員として赴任したのである。

守谷氏等の青少年が、ハヴィランド氏から教えられたフットボールをどのように伝えたかつまり明らかではないが、函館商業学校蹴球部の創立が明治 32 年(1899)、守谷氏 5 年生のときであることを思えば、部活動では創立時から F A 式の蹴球が行われていたと考えられる。

大正 4 年(1915)東京高等師範学校を卒業した元木省吾氏が函館師範学校教官として赴任、蹴球を伝授した。これをうけて、大正 10 年(1921)校友会に蹴球部が創立された。これは、明治 26 年に函館

で W・ハヴィランド氏が指導したフットボールが東京高等師範を経て再移入されたことになるだろう。

大正 10 年大日本蹴球協会が発足、全国的には各地域の帝国大学がリーダーとなって大会開催等の主催をし、高等学校・専門学校・中等学校への普及を進めるようになった。

大正 12 年北海道帝国大学に蹴球部創設、市内の中等学校に蹴球部の創設を働きかけ、第 1 回全道中等学校蹴球争覇戦主催、参加校：札幌一中、札幌二中、札幌師範、北海中、札幌商業、小樽中、小樽商業、函館商業、函館中、函館師範。

函館に発した黎明の曙光がようやく道央まで届いたと見ることが出来る。

昭和 2 年(1927)日本蹴球協会北海道支部設立(北大内に事務局)、昭和 3 年函館蹴球連盟創立、昭和 4 年日本蹴球協会北海道支部を北海道蹴球協会と改称、函館蹴球連盟を函館蹴球協会と改称し北海道蹴球協会の下部組織となる。日本蹴球協会から北海道蹴球協会へと繋がり出来たが、組織的に事業が進められる体制には至らず、全国大会等については、帝国大学、東京高等師範学校、大手新聞社等の主催にゆだねられていた。

* 黎明期における Walter Augustus De Havilland(ウォルター・アウグスタス・デ・ハヴィランド)氏のこと *

80 周年記念誌特別編集委員 小山昌吾

明治 23 年(1890)当時のフットボールは、函館新聞の記事のようにラグビーとサッカーが混合した荒々しいものだった。

英国で 1863 年にフットボールアソシエーション(蹴球協会)が出来て、統一したルール(ア式蹴球とか F A 式ルールといわれていた)のもとに試合が行われるようになったが、明治 23 年(1890)の函館はここに至らない前段階にあったと思われる。

明治 11 年(1878)文部省により、東京に体操伝習所が設置された。明治 19 年(1886)体操伝習所が高等師範に吸収され、体操専修科となった。新聞記事の函館商業の遠藤教員は前記の伝習所とか、専修科を出て函館商業に赴任してきたようである。遠藤教員の学んだフットボールはラグビーとフットボールの混合したルールであったと思われる。

では、何時からアソシエーション式のフットボールが行われるようになったかといえば、北海道では 1893 年(明治 26 年)から 1896 年(明治 29 年)まで、函館市の日本聖公会函館ヨハネ教会の宣教師ウォルター・アンドリュース師のもとに寄留していた英人ウォルター・アウグスタス・デ・ハヴィランド (Walter Augustus De Havilland) 氏よってもたらされたのが初めてである。

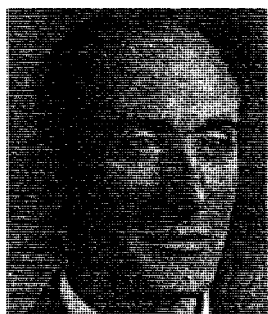
日本では、1904 年(明治 37)上記ウォルター・アウグスタス・デ・ハヴィランド氏が東京高等師範学校に教員として赴任、学生に F A 式フットボールを指導したのが始まりであるという(日本体育協会発行:スポーツ八十年史)。これより 12 年も前に北海道函館で同一人物によって青少年に F A 式フットボールの指導がなされていたということは、特筆すべきことである。

函館商業学校 1 年生守谷忍氏(1895~1900 在学)は「函商八十年史」の中で、「日曜日の遊びは常に谷地頭の運動場に行き、クリケットやフットボールなどにふけておりました。教えたのは 6 尺以上ある教師で、名はわすれました。」と回想している。この外人は、ウォルター・アウグスタス・デ・ハヴィランド氏であると思われる。チームを作って試合をするというようなものではなく、彼自身まだ 22~3 歳、英語を個人指導していた子弟や同じグラウンドに集まって来る少年等にフットボールのルールを指導しながら、彼もプレーを楽しんでいたであろう。

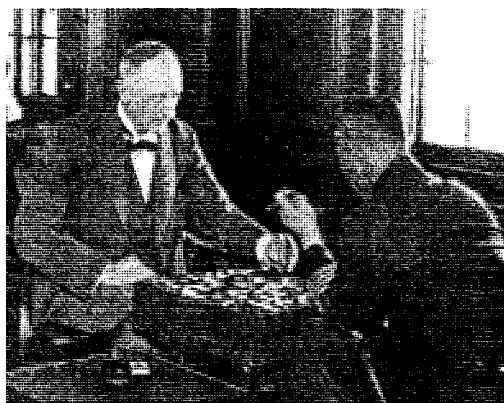
ウォルター・アウグスタス・デ・ハヴィランド氏 略歴

1872年	(明治5年)	8月31日出生 ケントのレウィッシュハムに生まれ、チャネル諸島のガーンジーで育った。 チャールズ・リチャード・デ・ハヴィランドの10人の子供の末子として生まれた。
1893年	(明治26年)	ケンブリッジ大学で競艇に優勝、ケンブリッジ・オールを受賞。 ケンブリッジ大学卒業、M. A学位を取得。 船便にて、実兄ジョージ・メイトランド・デ・ハヴィランドのいた日本に向かい、横浜に着くとすぐに北海道(函館)に行き、日本聖公会函館ヨハネ教会の主教ウォルター・アンドリュース師の元に寄留し子弟に対する英語の個人教授をしていた。スポーツ万能選手で、子弟らに谷地頭のグラウンドや函館公園広場で、クリケットやフットボールを指導した。この子弟の中に函館商業学校、第1回卒業生守谷忍氏がいたと思われる。
1896年	(明治29年)	函館から聖公会系の神戸乾行義塾へ転任。(神戸松蔭女子学院百年史参照)
1898年	(明治31年)	金沢第四高等学校教員就任。(4月)
1904年	(明治37年)	東京高等師範学校教員に就任。(9月) 生徒にアソシエーション式フットボールを指導し、金沢第四高校の卒業生や横浜の外人チームと試合をし、自らも選手として出場した記録が校友会誌に記載されている。 日本国内のサッカー史では、これが日本におけるF A式フットボールの起源とされている
1906年	(明治39年)	東京高等師範学校を辞し、東京麹町に特許事務所を開設した。特許弁理士の資格を取得したようである。
1910年	(明治43年)	「基のABC」を香港のケレン・ウォッシュ社から発刊。囲碁のみならずチェスも強かったそうである。
1914年	(大正3年)	11月30日リリアン・アウグスタス・ルーセ(パークシャ・リーディングで1886年6月11日出生)と結婚。ハヴィランド42歳、リリアン28歳。彼女がパナマ経由でイギリスに帰る船上で求婚、ニューヨークでドックに入る際に結婚、新婚旅行はナイアガラの滝。
1915年	(大正4年)	7月1日 長女オリビア・メアリー誕生。
1917年	(大正6年)	10月22日 次女ジョン・デ・ポーボアール誕生。
1919年	(大正8年)	2月離婚 一家がイタリアに向かう途中カルフォルニアのロスアンジェルスで離婚、ハヴィランドは日本に帰国、リリアンは二人の娘と共にアメリカに残った。
1932年	(昭和7年)	ジョン(15歳)来日、東京・横浜で父ハヴィランド氏と継母ヨキさんと生活する。
1934年	(昭和9年)	ジョン(16歳11か月)父と不仲になり、アメリカに帰国。その後、16年間父と会わず。
1940年	(昭和15年か16年)	太平洋戦争のため離日。戦争開始直前まで在日し、アメリカに移住した。アメリカでの生活については殆ど不明。
1941年	(昭和16年)	ジョン、ヒッチコック監督の「断崖」でアカデミー賞受賞。
1949年	(昭和24年)	オリビア、「女相続人」でアカデミー賞受賞。
1950年	(昭和25年)	ジョンと16年ぶりに再会する。ジョン32歳、ハヴィランド78歳。
1968年	(昭和43年)	カナダ、バンクーバーの近郊で、96歳で死去。3番目の妻ローズ・メアリーとは非常に幸福に暮していたとのこと。

明治26年～29年 函館の青少年にフットボールを指導したW・デハビランド氏



Walter de Havilland
about the time he met
Lilian Rusé



W・デハビランド 40歳の頃

W・デハビランド 60歳の頃

< ジョン・フォンティン自伝より転載 >